

マダム貞奴

長谷川時雨

青空文庫

人一代の伝を委しく残そうとすれば誰人を伝しても一部の小冊は得られよう。ましてその閱歴は波瀾万丈、我国新女優の先駆者であり、泰西の劇団にもその名を輝かして来た、マダム貞奴を、細かに書いたらばどれほど大部の人間生活の縮図が見られるであろう。あたしは暇にあかしてそうして見たかった。彼女の日常起居、生れてからの一切を聴いて、それを忠実な自叙伝ふうな書き方にしてゆきたいと願った。

けれどもそれはまた一方には至難な事でもあつた。芸術の徒とはいえ、彼女は人気を一番大切に心がけている女優であり、またあまり過去の一切をあからさまにしたくない現在であるかも知れない。彼女の過去は亡夫川上音二郎と共に嘗めた辛酸であつた。決して恥ずかしいことでも、打明けるに躊躇するにもおよばぬものと思うが、女の身として、もうすでに帝都隱退興行までしてしまつたあととて、何分世話になつてゐる福沢氏への遠慮なども考慮したかも知れないが、その前にも二、三度逢つたおり言つてみたが、微笑と軽いうなずきだけで、さて何日になつても日を定めて語ろうとした事のなかつたのは、

全くあの人にとつても遺憾なことであつた。私は貞奴の女優隠退を表面だけ華やかなもの
にしないで、内容のあるものとして残しておく記念を求めたかつた。そして自分勝手では
あるがわたしの一生の仕事の一つと思つてゐる美人伝のためにも、またあの人のためにも
集の一つを提供して、新女優の祖のために、特別に一冊を作りたいたいと思つていたが、その
希望は実現されなかつた。参考にしたいと思う種々の切抜き記事について、間違ひはない
かと聞直ききなほしたのにも分はつきり明はつきりした返事は与えられなかつたから、わたしは記憶を辿たどつて書
くよりほか仕方がなくなつてしまつた。それがため、女優第一人者を、誠意をもつて誤ごびゆ
謬うなく書残しておこうとしたことが画餅がべいになつてしまつたのを、大変残りおしく思う。

わたしの知人の一人はこういう事をいつてくれた。

「花柳界には止名とめなというものがあつて、名妓めいぎの名をやたらに後のものに許さない。それだ
けの見識をそなえたものならば知らず、あまりよい名は——つまり名妓をだしたのを誇り
にして、取つておきにする例がある。たとえば新橋でほんた、芳よしちよう町やっこで奴やっこというように

……」

その芳町の名妓やっこが貞奴であることは知らぬものもあるまい。

奴の名は二代とも名妓がつづいた。そして二代とも芳町の「奴」で通る有名な女だつた。

先代の奴は、美人のほまれだけ高くて早く亡びてしまった。重い肺病であったが福地桜痴ふくちおうぢ居士ちじが死ぬまで愛して、その身も不治の病の根を受けたという事であった。後の奴が川上貞奴なのである。

貞奴に逢ったのは芝居の楽屋でだった。市村座いちむらざで菊五郎、吉右衛門きちえもんの青年俳優の一座を向うへ廻して、松居松葉氏まついしやうよう訳の「軍神」の一幕を出した、もう引退まえの女優生活晩年の活動時機であった。小さな花束を贈ったわたしは楽屋へ招かれていった。入口の間まには桑くわの鏡台を置いて、束髪そくはつの芳子よしこ（その当時の養女、もと新橋芸者の寿福じゆふく——後に蒲田かまたの映画女優となった川田芳子）が女番頭おんなばんとうに帯をしめてもらって、帰り仕度をして、いるところであった。八畳の部屋が狭いほど、花束や花輪や、贈りものが飾ってあって、腰の低い、四条派ふうの金屏風きんびやうぶを廻めぐらした中に、鏡台、化粧品置台おきだい、丸火鉢まるひばちなどを、後や左右にして、くるりとこつちへ向直むきなほった貞奴は、あの一流のつんと前髪まへかみを突上げた束髪あしで、キチンと着物を着て、金の光る丸帯を幅広く結んだ姿であった。顔は頬ほおがこけて顎あごのやや角ばっているのが目に立ったが、眼は美しかった。

とはいえ当年の面影はなく、つい少時すこしまえ前舞台で見た艶麗優雅さは、衣装かつらや鬘まつりとともに

取片附けられてしまつて、やや権けん高い令夫人けんだかぶりであつた。この女にはこういう一面があるのだなど、わたしはちよつと気持ちかがハグらかされた。

わたしはそのほかに貞奴の外出姿を幾度も見かけた。多くは黒紋附きの羽織をきているが、彼女はやっぱり異国的エキゾチックのおつくりの方が遥はるかに美しかった。ある時国府津行の一等車に乗つたおりは純白なシヨールを深々と豊かにかけていたのが顔を引立ひきたてて見せた。内幸うちきやく町で見かけた時は腕車の膝かけの上まで、長い緑色のを垂たらしてかけていたが、それも大層落附おちつきいていた。

二度目に新富座しんとみざへ招かれていつた時に、俳優としてあけっぱなしの彼女に、はじめて逢つたのであつた。そのおりは、新派の喜多村きたむらと一座をしていた。喜多村は泉鏡花氏作「滝たきの白糸しろいし」の、白糸という水芸みずげいの太夫たゆうになつていた。貞奴はその妹分の優しい、初う々しい大丸鬚おおまるまげの若いお嫁さんの役で、可憐かれんな、本当に素すの貞奴の、廿はたちだい代だいを思わせおもせる面差しおもをしていた。そのおりの中幕なかまくに、喜多村が新しい演出ぶりを試みた、たしか『白樺しろかば』掲載の、武者小路実篤むしやのこうじさねあつ氏的一幕ものであつたかと思う。殿様が恋慕れんぼしていた腰元こしもとが不義をして、対手あいての若侍と並んで刑に処せられようとする三角恋愛に、悪びれずにお手打ちになろうとする女と、助かりたさと恐怖に、目の眩くらんでいる若侍と、一種独

特な人世觀を持った殿様とが登場する狂言で、殿様が喜多村緑郎、若侍が花柳章太郎、貞奴が腰元であった。腰元は振袖の白無垢の裾をひいて、水浅黄ちりめんの扱帯を前にたらし、繩にかかつて、島田の鬘を重そうに首を垂れていた。しかしその腰元の歩みぶりや、すべての挙止が、あまりにきかぬ気の貞奴まるだしであったのが物足りなかつた。何故オフィリヤやデステモナやトスカや、悄悄々と敵將の前へ身を投出すヴァンナの、あの幽雅なものごしと可憐さを、自分の生れた国の女性に現せないのだろう、異国の女性に扮するときはあるほど自信のある演出するのにと思った。その幕がおわつてから楽屋へ訪れたのであつた。

卓にお膳立が出来ていて、空席になつているところがわたしのために設けられた場所であつた。貞奴は鏡台をうしろにして中央にいた。すぐそのとなりに福沢さんがいた。御馳走の充分なのに干魚がなければ食べられないといつて次の間で焼かせたりした。わたしは（ああこれだな、時折舞台が御殿のような場で楽屋の方から干魚の匂いがして来て、現実暴露というほどでもないが興味をさませるのは——）などと思つていた。福沢さんがお茶づけが食べたいというのと、女茶碗のかわいいのへ盛つて、象牙の箸をそえてもたせた。新富座の楽屋うらは河岸の方へかけて意気な住居が多いので物売りの声がよくきこ

えた。すると貞奴は、

「早くあの 豌豆えんどうを買って頂ちやうだい、塩煎いりよ。」

と注文した。福沢さんがあんなものをといつたが、あたしは大好きなだからと買わせて食くべながら「これは柔らかいからおいしくない」といつて笑った。

そうした様子がから駄々だだつ子で、あの西洋にまで貞奴の名を轟とどろかして来た人とは思われないまで他たあいがなかった。飯事ままごのように暮している新夫婦か、まだ夢のような恋をたのしんでいる情人同士のようであった。貞奴の声は柔かくあまく響こいでいた。

「昨日きのうはね、瘦やせつぽちつて怒鳴なみられたのですよ。この間はね、福桃ふくももさん、あんなに瘦やせたよ——ですつて……」

彼女は煙草タバコをくゆらしながらおかしそうに笑った。そう言われなくても気がついていたが、彼女の体はほんとに痛々しいほど瘦やつれていて、肩の骨もあらわならば、手足などはほんとに細こかった。その割に顔は瘦やせが目めにたたない、ふくみ綿わたをするとすっかり昔の面影おもかげになる。

(ああ、あの眼が千両なのだ)

あの眼が光彩をはなつうちは楚々そそたる佳人かじょになつて永久に彼女は若いと眺められた。福

沢粹士にせよこの人にもせよ、見えすいた、そんな遊戯気分を繰返すのは、醒めた心には随分さびしいであろうが、それを嬉しうにしてゐる貞奴をわたしは貞淑なものだと思つた。彼女は荒い柄のお召のドテラに浴衣を重ね、博多の男帯をくるくると巻きつけ、髪は楽屋銀杏いちようにひつつめていた。そうしたおりの顔は夫人姿の時よりもずっと趣があつて懐しみがあつた。喜多村が旅行きの役やくのことで、白糸の後の幕の扮装のままできると、手軽に飲みこみよく話をはこんでいた。

「とても僕たちにはあれだけは分らない。意味の通じないことを二言三言いって、そのままで別れて幾日か立つと舞台で逢うのだ。それがちゃんと具合よくいつてるのだから分らない。」

福沢さんが、他の人ほかとそんなことを話合つてゐるのを聴き残して、わたしはまた以前の見物席の方へかえつて来た。暫くするとドカドカと二、三人の人が、入りのすくない土間の、私のすぐ後へ来た様子だったが、その折は貞奴の出場でばになつていた。

「ねえ、僕が川上の世話を焼きすぎるといつて心配したり、かれこれいうものがあるけれど、男は女に惚ほれてゐるに限ると思ふのです。」

そういう特種とくしゆの社会哲学を、誰たれが誰に語つてゐるのかと思えば、聴手ききてには後に耳うしろのな

いわたしへで、語りかけるのは福沢氏だった。わたしは微笑を含みながら真面目になって、そのくせ後へはむきもせず耳をすましていた。

「これが男に惚れこんでごらんさい。なかなか大変なことになる。印形も要る。名譽もかけなければならぬ。万が一のときは、俺は見そこなつたのだなんていう事は逃口上うじょうにしかならない。一たん惚れたら全部でなければならぬから——其処へゆくと女の望みは知れています。ダイヤモンド、着物、おつきあい、その上で家を買うぐらいなものだから。」

わたしはなるほどと思った。事業家の恋愛は妙な原則があるものだと感じた。しかし私はまるであべこべなことを感じたのであった。男同士が人物を見込んでの關係は——単に商才や手腕に惚れ込んだのは、どん底にぶつかつたところか——自今の世相から見ても、生命いのちをかけたいわゆる男の、武士道的な誓約のある事を、寡聞かぶんにして知らないから——物質と社会上の位置とを失えば、あるいは低めれば済むのである。男女の愛情はそうはゆかない。譬たとい表面は何事もなかつたおりは、あるいはダイヤモンド、おつきあい、着物、家ぐらいですむかも知れないが、それは悲しい真に貧乏な恋愛で、そんな水準レベルにおかれた恋愛で満足している男女がありとすれば、実にお気の毒なものといわなければならぬ。わたし

しは言う、感情、感覺、全精神を打込んだ男女恋愛のどん底は魂の交感であり、命の掴みあいである。死と生が其処にあるばかりで何物をもまじえることの出来ない絶対のものであらねばならぬ。

(けれどこの人は、愛するものにはいわなかった。惚れたという普通軽く言いはなされる言葉をつかった。そこに用意があるのかも知れない。)

と思うとまた貞奴の、先刻の褪めきつていて陶酔しているようなとりなしが目に見えた。では白熱時代の貞奴は？

わたしは急がずに書いてゆこう。四、五年前に京都から来て内幸町の貞奴の家へ草鞋をぬいだ、祇園のある老妓はこう言ったことがある。

「芝居から帰ると二階へあがって、寝る前に白葡萄酒をあがるのえ、わたしもお相伴するわ。それから寝るまで話をします。けれど、川上さんのお位牌には私が毎日拜んでおいてあげます。お貞さん香華もあげやせん。あの人は強い人で、しまいには川上さんとも仲がよいのうて、あつちの室とこつちの室とに別れて、財産も別だったような——」

この老妓の談話は賤しかった。香華を手向けないゆえ不貞だということにもきこえたが、あれほど立派に川上の意志をついでいれば、それをこそ川上は悦んでよいのである。仲が

よくなつたといわれた亡夫の意志を、何処までも続いて名声を持ってゆこうとするのには、どれ位人知れぬ苦勞があつたか知れはしない。あの勝気な松井須磨子が、人氣のある盛りの身で、一人になれば、猶なおよさ更自由でありそんなものに思われてさえ、先生抱月ほうげつ氏に別れては、楯たてなしでは突進も出来なかつたではないか。それをもう衰運であり、他に彼女を引立てて、一座の明ブリマドンナ星と輝かせ得るほどの対手あいてかたをもつていながつた彼女が、貞奴の名を忘れないものにさせるのにどんな氣苦勞をしたか——老妓は金銭問題のことを言つたが、多年、川上のためには、彼女は全身を投出なげして来た人である。僅少わずかの貯蓄たくわえで夫妻が冷たくなろうとは思われる理由がない。老妓の推測は自分だけの心にしかわからなかつたのであろう。老妓の目に夫妻の金銭問題と見えたのは、事業と一家の經濟との區別をたてたのを悪くつたのではあるまいか？ 彼女も女である。ことに氣は剛でも身体からだは纖弱かよわい。心の勞つかれに撓うむこともあつたであらう。そういうおり夫の果しもない事業慾に——それもありふれた事をきらう大懸おおがりの仕事に、何もかも投じてしまふ癖くせのあるのを知つて、せめて後顧こうこの憂うれいのないようにと考へたのではなからうか。それはあの勝気な女性にも、長い間の辛勞を、艱難かんなん困苦を思出すと、もう欠乏には堪えられそうもないと思うような、彼女の年が用意をさせたのでもあらうか——

川上が亡なくなるすこし前の事であった。貞奴夫婦を箱根で見かけた時は、貞奴は浴衣がけで宮の下から塔の沢まで来た。その折など決して彼女が、自分の財たくわえ袋だけ重くしている人とは見られなかった。彼女は夫のためにはいかにも真しん率そつで、赤裸々でつくしていたと、わたしは思っている。我わが儘ままで自我のつよい芸術家同士は、ときに反感の眼をむいて睨にらみあったことがあったかも知れない、あるいは川上の晩年には互いの心に反そりが出て、そういう日が多かったかも知れない。けれどもわたしは貞奴を貞婦だと思う。

気性もの、意地で突つ張つてゆく、何処までも弱い涙を見せまいとする女——そういう人に貞奴も生れついでにいるようだ。そうした生れだちのものは損なのは知れている。女性 は気弱く見える方が強きようじん靱じんだ。しっかりと自分だけを保護して、そして比較的安全に他人の影にかくれて根強く棲せい息そくする。強気のものには我に頼んで、力の折れやすいのを量はからずに一氣に事を為なし遂げようとする。ことに義侠心と同情心の強いものがより多く一本氣で向う見ずである。

わたしは自分の気質からおして、何でもかでもそうだと貞奴をこの鑄い型がたに嵌はめようとするのではないが、彼女も正直な負けずぎらいであつたらうと思つている。そしてそういう気質のものが胸算用をしいしい川上を助けたとはどうしても思われぬ。彼女は強い、そ

れこそ、身を炎にしていまいそんな自分自身の信仰を傾け尽して、そこに幾分かの好奇心を交えて、夫川上の事業を助けたのであろう。そこにはまた、彼女の生れた血が、伝統的義侠と物好ものずきな江戸人の特色を多く含んでいた事や、氣負い肌はだの養母に育てられた事や、芝居と小説の架空人物に自らをよそえた、偽りの生活を享樂している中に住んで、不安もなく、むしろ面白おかしく日を送っていた若き日のことであるゆえ、彼女は自分というものの力が、夫にとって、そのまた新しい事業にとって、どれほど有力なものであるかを知ったときに、全く献身的な、多少冷静に考えるものには、無鉄砲な遊戯と見えるほどの冒険も敢あえてしたのであろう。そうした人が金銭のことから他人がましくなるうはずはない。もしなつたとすれば、それは夫妻の内部から破綻はたんが、表面にまで及ぼしてきて、物質関係まで他人がましくなつたのだと思わなければならぬ。その折はすでに愛情は冷却して、そのくせ女の方は、あまり高価な、かけがえのない犠牲を払って来た若き日の、あの尊とうとかりし我熱情の、徒いたずらに消耗された事を思い嘆くあまりの、焦燥から来た我執とみなればなるまい。

けれど、もし仮にそうであつたとすれば貞奴の思違いであつた。彼女は夫を助けたのであろう。夫のために犠牲として、夫の事業の傀かい儡らいとなつたのであろう。けれどそれは最

初のこと、運命は転換した。演劇に新派を建立し、翻譯劇に彼地の風俗人情、思想をいちやく紹介した川上の事業はとにかく成功した。かげでこそオツペケペなぞと旗上げ當時を回想して擲揄するものもあつたが、演劇界に新たな一線を劃すだけのことを川上はやり通した。そして、それと同時に、川上の成功に比して劣らぬ地歩を貞奴もしめたのである。艱難かんなんに堪え得た彼女の体が生みだした成功と名誉である。けれど、けれど、けれど、其処に川上という具眼者がなくて彼女の今日があつたであらうか。

いえ、それは誰れよりもよく、当の貞奴が知っている。彼女は一も川上、二も川上と、夫を立てていた。負けぬ気の彼女も川上には心服していた。それはどのような英雄、豪傑にも裏はある。美点も弱点も、妻と夫ほど知り尽すものがあるか。瓦かわらを珠たまとおもう愚者でないかぎり、他人には傑えらい夫も、妻は物足らぬ底そこを知るものだ。貞奴と川上との間だけがそれらの外とはいえない。それですら貞奴は夫を傑えらいと思つていた。一面には罵ののりながら、一面には敬けいしていたに相違ない。

罵るとは？ 心中に軽蔑けいべつしていたことである。彼女にはともすれば拭ぬぐわれがたい汚辱を感じることもあるであらう。夫が無暴むぼうな渡航を思立って、見も知らぬ外国へ渡り窮乏したおりのことである。また一座十九人に、食物も与えられなかつたおりのことである。雪

のモスクワで——さまよいあかした亜米利加で——彼女が身を投捨て人々の急を救つたといわれている。それは彼女にも苦痛な思出であつたであらう。それかあらぬか噂には、折々川上が貞奴に辱しめられていたこともあるといわれた。

敬さなければならぬ第一は、いうまでもなく彼女が女優として舞台生活をする第一歩を与え導かれたことである。彼女の夫が彼女を舞台にたてさせたのは、他の必要から来た——あるいは人気取り策であつたかも知れなかつた。けれど、その当否はともかくとして、我国の、新女優の先駆者としては、此後どれほどの名女優が出ようと、川上貞奴に先覚者の栄冠はさすげなければなるまい。技芸はどうでも、顔のよしあしは如何でも、ただそれだけでも残り止まる名であるのに、何という運のよいことか、貞奴は美貌であり、舞台も忽かでない。彼女は第二の出雲のお国であつて、お国より世界的の女優となつた。

人はあるいは時勢がそうさせたのだというかも知れない。なるほど彼女は幸運な時にいたのである。とはいえ世人の要求よりはずつと早く彼女は生れ、そして思いがけぬ地歩を占めている。松井須磨子の名は先輩の彼女より名高く人気があるように思われたが、とても貞奴の盛時の素晴しかったのには及ばない。悲しくも年を取るといふ事が何よりも争われない人気の消長であるのと、よい指導者を持つたと、持たないとの懸隔が、あの粗

野な、とても優雅な感情の持主にはなれない、女おんな 酋しゆう 長ちやう のような須磨子を劇界の女王、
 プリマドンナ
 明 星せい とした。貞奴に学問はなくとも、もすこし時代の潮流を見るの明めい があつたならば、
 何処までも彼女は中央劇壇の主星すター であつたであろう。創作力のない彼女は、川上歿ぼつご 後も彼
 れによつて纏まと めてもらつた俳優の資格を保守するに過ぎなかつたが、時流はグングンと急
 激に變つていった。彼女は端の方へ押流され片寄せられてしまつて、早くも引退を名にし
 た興行で地方を廻らなければならぬようにされてしまつた。時代の要求は女優を必要と
 し、多くの急造女優は消えたり出たりしている。帝劇が十年の月日のうちに候補者を絶え
 ず補充しながらも、律子、嘉久子、浪子の第一期生のうちの幾人かを収獲したにすぎず、
 あとはまだ未知数になつている。その他の劇団では何もかもたつた一人の須磨子を死なせ
 てしまつては、もうあとは語るにも足りぬ有様となつてしまつた。

そんなであるに、もう貞奴は忘れられたものになつてゐる。彼女はもうお婆さんである
 から人気をひかないというような、当事者の思いあまりからばかり、彼女が圈外はねの に跳退はね け
 られたのではなく、若いおり聡明そうめい であつた彼女の頭が、すこし頑迷がんめい になつたためでは
 あるまいか、若いうちは皮相な芸でも突きこんでゆこうとする勇氣があつた。後にはただ
 繰返しにすぎないものとなつて、すこしの進境もなく、理解のともなわぬ、ただお芝居を

するだけになつた芸道の墮落のためだと思ふ。そうした真価の暴露されたのは、川上を失つたためであるといつて好いであろう。

川上とて、いまも生きて舞台に立つていたならば、新派創造時代の雑駁ざつぱくな面影をとどめていて、むしろ恥多き晩年であつたかもしれない。しかし彼れが動かさずに、いつまでも自分に固定していようとは思われない。一層彼れは黒幕になつて画策したことであろう。彼れはきつと女優全盛期に向つている機運をはずさず、貞奴をもつと高める工夫をこらしたに違ひない。

それとても、彼女が願うように——いま福沢さんが後援しているように——表面だけ賑にぎやかしの興行政策をとつたかも知れない、貞奴自身の望みとあれば……

貞奴に惜しむのは功なり名遂げてという念をおこさずに、何処までも芸術と討死うちじにの覚悟のなかつた事である。努力が足りなかつたと思う。わたしのいう努力とは、勢力運動のことではない。教養の事である。新時代に適するように頭を作る必要であつた。そしたらいま彼女はどんな位置にいられたらう。芸術に年齢としのあるはずはない。

貞奴は導かれて行きさえすればきつと進んでゆく人である。あるいは、もうあれだけで充分ではないか、随分花も咲かせて来た、後のことは後のものにまかせて、ちつとは残しておいてやった方がよいと言うものがあるかも知れない。それは貞奴の生涯の、前半生の頁だけを繰ってそれで足れりとする人のいう事である。何にも完全はのぞまれないとしても、わたしという慾張りには、おなじ時代に生れた女性の、一方の代表者を、よりよく、より輝かしい光彩をそえて、終りまでの頁を、立派なものにして残したいと望んだからであった。小さな断片でも永久に亡びない芸術品はあるが、貞奴のそれは大きく、広く、波動に包まれた響きの結晶である。それが末になつて崩れていたならば、折角築きあげられたものの形を完全なさいではないか、わたしの理想からいえば、貞奴の身体が晩年にだけせめて樂をしようとするのに同情しながらも、それを許したくなく思った。芸術に生き、芸術に滅びてもらいたかつた。雄々しく戦つて、瘦枯れた軀を舞台に横たえたとき、わたしたちはどんなに、どんなに彼女のために涙をおしまないだろう。讚美するだろう。美しい女優たちは、自分たちの前にたつて荊棘の道を死ぬまで切りひらいた女の足許に平伏して、感謝の涙に死体の裳裾をぬらし、額に接吻し、捧ぐる花に彼女を埋めつくすであらう。詩

人の群はいみじき挽歌を唄つて柩の前を練りあるくであろう。楽人は悼みの曲を奏し、市人は感嘆の声をおしまず、文章家は彼女が生れたおりから死までが、かくなくてはならぬ人に生れたことを、端巖な筆に綴りあわせたであろう。わたしはそうした終りを最初の女優のこの人に望んだ。そう望むのが不当であろうとは思っていない。

引退ののりの配りものである茶碗には自筆で、

兎も角ものがれ住むべく野菊かな

の詠がある。自選であるか、自詠であるかどうかは知らないが、それにしても最初の句の「ともかくも」とは拠どころなくという意味も含んでいる。仕方がないからとの捨鉢もある。まあこんな事にしておいてという糊塗した気味もある。どこやらに押付けたものを籠めていて不平がある句といつてもよい。「とりあえず」「どうやらこうやら」という意にも訳せないことはないが、それでは嘘になる。何故ならば、彼女の引退は突然の思立ちかも知れないが、そうした動機が読みこまれているようにとはとれないほど準備した興行ぶりであった。住む家もこれからの生活も安定なものである事は誰れも知ったことで、無常を感じたり、禅機などから一転して急に世からのがれたくなつたのではない事はあんまり知れすぎている。それゆえに、草の中へでもかくれてしまおうというような「とりあえず」

には思いおよぶことが出来ない。もしもまた、亡夫川上の墓石もたてたから、これをよい時機として役者を止めようとしたのであったならば、貞奴の光彩のなくなったのも尤もだと、うなず頷かなければならないのは、あれほどの人でも役者をただ商売としていたかと思うそれである。

思わずも憎まれ口になりかかった。わたしがそう言うのも、その実は、この女優の引退をおくるに世間があんまり物忘れが早くて、案外同情を寄せなかつたことに憤慨したゆえでもあった。わたしはせめてこの優ひとに培つちか養われた帝劇の女優たちだけでも、もすこし微意を表して、所属劇場で許さなくとも、女優たちの運動があつて、かの女の最終の舞台を飾り、淋しい心であろう先輩を悦ばせてもよかつたであらうにと思った。

彼女は日本の代表的名女優として海外にまでその名を知られている。かえつて日本においてより外国の方が名声は噴さく々さくとしている。進ま取い邁しん進しんした彼女のあとにつづいたものは一人もない。もうその間あいだは十幾年になるが、一人として彼女の墨ろを摩ましたものはないではないか。それは誰れでも自信はあるであらう。貞奴に負けるものかとの自負はあつても、他から見るとそうは許されぬ。それは彼女の技芸そのものよりは度胸が、容姿が、どんな大都会へ出ても、大劇場へ行つても悪びれさせないだけの資格をそなえている。貞奴

のあの魅惑のある艶治な微笑みとあの嫋々たる悩ましさと、あの楚楚たる可憐な風姿とは、いまのところ他の女優の、誰れ一人が及びもつかない魅力と風趣とをもっている。彼の地の劇界で、この極東の、たった一人しかなかった最初の女優に、梨花の雨に悩んだような風情を見出して、どんなに驚異の眼を見張ったであろう。彼女のその手嫋かな、いかにも手嫋女といった風情が、すっかり彼地の人の心を囚えてしまった。あの強い意志の人の舞台が、こうまで可憐であろうとは、ほんとに見ぬ人には信じられないほどである。それはわたしの鼻肩目がそう言わせるのではない。彼地の最高の劇評家にも認められた。アーサー・シモンズも著書の頁のいく部分を彼女のために割いた。

それは彼女の過去の辛苦が咲かせた花であろう。外国へ彼女が残して来た日本女の印象が、決してはずかしくないものであったことだけでも、後から出たものは感謝しなければならぬ。後のものは時代の要求によって生れて来たとはいえ、彼女の成功を見せた事が刺戟になっっている事はいうまでもない。彼女が海の外へ出ていた仕事も、帰朝して来て当時の人に目新しい扮装ぶりを見せたのも、現今の女優のまだ赤ん坊であったころのことである。策士川上が貞奴の名を揚げるために種々と、世人の好奇心をひくような物語を案出するのであろうとはいわれたが、彼女の技芸に、姿色に、魅惑されたものは

多かつた。それは全く、彼女によつて示された、「祖国」のヒロインや「オセロ」のデスデモナなどは、今日の日本劇壇にもちよつと発見することが困難であろうと思うほど立派なもので、ありふれた貧弱なものではなかつた。最初の女優を迎えた物珍らしさと、憧^{どうけ}憬^{けい}する泰西の劇をその美貌の女優を通して見るといふ事が、どれほど若い者の心を動かしたか知れなかつた。京都で大学生が血書をして切^{せつ}ない思いのあまりを言い入れたとかいふような事は、貞奴の全盛期にはすこしも珍らしい出来ごとではない。そんな事に耳をかしていたならば、おそらくはも一人別^{べつ}に彼女というものがあつて、専念それらの手紙や会見の申込みに一々気の毒そうな顔をして断りをいったり書いたり、謝^{あやま}つたり、悦んだりしていなければならぬであらう。文壇の人では秋田^{あきた}雨雀^{うじやく}氏^しが貞奴心酔党の一人で、その当時早稲田^{わせだ}の学生であつた紅顔の美少年秋田は、それはそれは、熱烈至純な、貞奴讚美党であつた。いまでもその話が出れば秋田氏はごまかさず^{うなず}に頷^{うなず}く、

「まったく病氣のように心酔していたのですね、どんな事をしても見ないではいられなかつたのだから」

はつきりとそう言つて、古き思出もまた楽しからずやといったさまに、追憶の笑^{えみ}をふくまれる。わたしの眼にも美しかつた貞奴のまぼろしが浮みあがつて、共に微笑しつゝ、秋

田さんの眼にもまだこの幻は消えぬのであらうと思うと、美の力の永遠なものと、芸術の力の支配とに驚かされる。

その話は今から十五、六年前、明治卅五、六年のことかと思う。第二回目の渡航をして西欧諸国を廻つて素晴らしい人気を得た背景をもつて、はじめて日本の劇壇へ貞奴が現われたころのことであつた。ドイツでは有名な学者ウイルヒョウ博士が、最高の敬意を表して貞奴の手に接吻せつぶんをしたとか「トスカ」や「パトリ」の作者であるサルドーが親しく訪れたという事や、露西亞ロシアの皇帝からは、ダイヤモンド入りの時計を下賜かされたという事や、いたる土地ところの大歓迎のはなしや、ホテルの階段に外套がいとうを敷き、貞奴の足が触れたといつて、狂気して抱かかえて歸つたものがあつたことや、貞奴の旅情をなぐさめるためにと、旅宿の近所で花火をあげさせてばかりいた男の事や、彼女の通る街筋まちすじの群集が、「奴ヤツ、奴ヤツ」と熱狂して馬車を幾層にも取廻とりまいてしまつたという事や、いたるところでの成功の噂が伝わつて、人気を湧立わたせた。正直な文学青年の秋田氏が、美神みゆうずが急に天あまくだ下つたように感激したのは当り前だつた。そしてまた出現した貞奴も觀衆の期待を裏切らなかつたのであつたから、人気はいやがうえに沸騰し、熱狂の渦をまかせた。そのおり可哀そうな青森

の片田舎から出て来ていた貧乏な書生さん秋田は、何から何までも芝居の場代ばだいのために売らなければならなかったのだ。場代といつても、棧敷さじきや土間の一等観覧席ではない、ほんの三階の片隅に身をやつと立たせるにすぎなかったが、それでも毎日となれば書生の身には大変なことであった。すっかり貞奴熱に昂奮こうふんしてしまった少年秋田は、机と書籍の幾冊かと、身につけていた着物だけは残したがあとはみんな空しくしてしまった。しまいは部屋の畳の表までむしりとつて売払い、そして毎日感激をつづけていたとさえ言われる。

こんな清教徒ピュリタンの渴仰かつじょうを、もろもろの讃詞さんじと共に踏んで立った貞奴の得意さはどれほどであったろう。それにしても彼女におしむのは、彼女が芸を我生命として目覚め、ふるいたたなかった遺憾さである。それは余儀ない破目はめから女優になったとはいえ、こうまでに成功してゆけば、どれからはいつて歩んだとしても、道はひとつではないか、けれど、立脚地が違うゆえ、全生命を没頭しきれないで、ただ人気があったというだけにしてその後の研鑽琢磨たくまを投げすててしまい、川上の借財をかえしたのと、立派な葬式を出したのと、石碑を建てたからよい引きしおであるというだけが、引退の理由なのが惜しい。最初から女優として立つ心はちつともなかったが、海外へ出て困窮のあまりになったのが動機であり、その後、断然や廃めるつもりであったのを、夫や知己に説かれて日本の舞台へも立つよ

うになつたとはいえ、それではあまりこの女優の生涯が御他力で、独創の見地がなく、女優生活の長い間に自分の使命のどんなものかを、思いあつたおりがなかつたのかと、全く惜まれる。ほんとおしい事には、芸術最高説の幾分でも力説してきかせるような人が彼女の傍近くそばにいなかつた事である。彼女には意地が何よりの命で、意気地を貫くという事がどれほど至難であり、どれほど快感であり、どれほど誇らしいものであるか知れないと思つていたのであろう。功なり名遂げなと、身退くみりぞという東洋風の先例にならない、女子としては有終の美をなしたと思つたであらう。貞奴という日本新劇壇の最初にもつた女優には、何処までも劇に没頭してもらいたかつた。あの人の望るいを摩まそうと目標にされるような、大女優にして残したかつた。こういうのも貞奴の舞台の美を愛惜するからである。

貞奴は癩かんしゃく癩しゃく持ちだという。その癩癩が薬にもなり毒にもなつたであらう。勝気で癩癩持ちに皮肉もののあるはずがない。それを亡川上なきの直系の門人たちが妙な感情にとらわれて、貞奴の引退興行の相談をうけても引受けなかつたり、建碑のことも楯たてを突きあつているのはあまり狭量ではあるまいか。かつて女優養生所に入所した、作家田村俊子さんは、貞奴を評して、子供っぽい可愛らしい、殊勝らしいところのある、初々ういういしくも見え

ることのある地方の人の粘ねばりづよい意地でなく、江戸っ子肌はだの勝気な意地でもつ人で、だから弱々と見えるときと、傍そばへも寄りつけぬほど強い時とがあつて、

「愚痴をいうのは嫌いだからだまっているけれども、何につけて人というものは深い察しのないものね」

などいつてる時は、ただ普通の、美しい纖弱かよわい女性とより見えないが、ペパアミントを飲んで、気焰きえんを吐いている時などは、女でいて活社会に奮闘している勇気のほども偲しのばれると言つた。それでも芝居うらぐの樂の日に、興行中に贈られた花の仕分けなどして、片づいて空になつた部屋に、帰ろうともせず茫然ぼうぜんと、何かに凭もたれている姿などを見ると、ただなんとなく涙なみだ含まれるときがある。マダム自身もそんなときは、一種の寂寞せきぼくを感じているのであろうともいつた。

寂寞——一種の寂寞——氣に驕おごるもののみが味わう、一種の寂寞である。それは俊子さんも味わつた。その人なればこそ、盛りの人貞奴しんりの心裡しんりの、何と名もつけようのない憂ゆう鬱つを見逃みのがさなかつたのであろう。

貞奴は、故市川九女八いちかわくめはちを評して、

「あの人も配偶者が豪えらかつたら、もすこし立派に世の中に出ていられたらうに、おしい事

だ」

といったそうである。これもまた貞奴なればこそ、そうしみじみ感じたのだ。自分の幸福なのと、九女八の不幸なのをくらべて見て、つくづくそう思ったのであろう。それから推しても貞奴が、どれほど夫を信じ、豪いと思っていたかが分る。川上にしても貞奴に対してつねに一歩譲っていた。貞奴もまた負けていなかったが、自分が思いもかけぬような名をなしたのも川上があつての事だ、夫が豪かつたからである、みんなそのおかげだと敬していたと思える。そうした敬虔な心持ちは、彼女の胸にいつまでも摺りへらされずに保たれていたゆえ、彼女がいくらずして可憐であり初々しいのだ。彼女の胸には恒に、少女心を失わずにいたに違いない。

わたしはいつであつたか歌舞伎座の廊下で、ふと耳にした囁きをわすれない。それは粹な身なりをしている新橋と築地辺の女人らしかったが、話はその頃噂立った、貞奴対福沢さんの問題らしかった。その一人の年増が答えるところが耳にはいった。

「それは違うわ、先の妾はああした女でしょう。貞奴さんはそうじゃない、あの人のことだから、お宝のことだつて、忍耐が出来るまでは口にする人じゃなし、それに、ああすればこうと、ポンといえば灰吹きどころじゃなく心持ちを読んで、痒ゆいところへ手の届く

ように、相手に口をきらせやしなから、そりやまるで段違いだわ、人間がさ」

それだけの言葉のうちに以前の寵妓ちようぎであつて、かえり見られなくなつた女と、貞奴との優劣がはつきりと分るような気がした。ほんの通り過ぎたにすぎないので、そのあとでも聴きたい話題があつたかも知れない。

順序として貞奴の早いころの生活についてすこし書かなければならない。わたしがまだ稽古本けいこほんのはいつたつばくろぐちを抱えて、大門通を住吉町すみよしちようまで歩いて通つていところ、芳町には抱え車かかぐるまのある芸妓があるといつてみんなが驚いているのを聞いた。わたしの家でも抱え車は父の裁判所行きじやうようの定用のほかは乗らなかつたので、何でも偉い事は父親が定木じやうぎであつた心には、なるほど偉い芸妓だと思つた。一人は丁字屋ちやうじの小照といい、一人は浜田屋やまの奴だやつこと聞いていた。小照は後に伊井蓉峰いゐようほうの細君となつたお貞ていさんさだで、奴は川上のお貞さださんであつた。浜田屋には強いおつかさんつかがいるのだという事もきいたが、わたしが気をつけて見るようになってからは、これもよい縹きりよう織ようだつた小奴という人の御神灯がさがつていて奴の名はなかつた。そのうちにおなじ住吉町の、人形町通りに近い方へ、写真屋のような入口へ、黒塗の看板サインプレートがかかつて、それには金文字で川上音二郎とするされてあつた。そして其処が奴のいるうちだと知つた。またその後、大森の、汽車

の線路から見るところへ小さな洋館が立つて、白聖造りが四辺とは異っているの目についた。それも川上の新らしい住居である事を知った。それは鳥越の中村座で川上の旗上げから洋行までの間のことである。

三

歴代の封建制度を破つて、今日の新日本が生れ、改造された明治前後には、俊豪、逸才が多く生れ、育くまれはぐ培われつちかつた時代である。貞奴は遅ればせに、またやや早めに生れて来たのである。生れたのは明治四年であつた。そして後年、貞奴に盛名を与えるに柱となり、土台となつた人々が、みな適当な位置に配置されて、彼女の生れてくるのを待つ運命になつていた。

もし彼女の生家が昔のままに連綿としていたならば、マダム貞奴の名は今日なかつたであらう。新女優の祖川上貞奴ははとならずに堅気かたぎな家の細君であつて、時折の芝居見物うつつさに鬱うつつさ散んする身となつていたかも知れない。

明治維新のことを老人たちは「瓦解がかい」という言葉をもつて話合っている。「瓦解」とは、

破壊と建設とをかねた、改造までの恐しい途程みちのりを言表いあらわした言葉であろう。すべての旧慣制度が破壊された世の渦は、ことに江戸が甚しかった。武家に次いでは名ある大町人がバタバタと倒産した。お城に近い日本橋両替町りょうがえちよう（現今の日本銀行附近）にかなりのおおだなの大店であつた、書籍と両替屋をかねて、町役人も勤めていた小熊という家もその数には洩もれなかつた。家附いえつきの娘おたかは御殿勤めの美人のきこえたかく、入婿いりむこの久次郎は仏さまと呼ばれるほどの好人物であつた。そうした円満な家庭にも、吹きすさぶ荒い世風は用捨もなく吹込んで、十二人目にお貞と呼ぶ美しい娘が生れたころは、芝神明しんめいのほとりに居を移して、書籍、薬、質屋などを営んでいた。しかも夫婦は贅ぜいたく沢を贅ぜいたく沢としらずに過して来た人たちであつたので、娘たちを育てるにもかなり華美な生活をつづけていた。次第々々に家産が傾くと知りつつもそれを喰くいと止めるだけの力がなかつた。終ついに窮乏がせまつて来て十二人目の娘を手離すようになった。そしてお貞という娘が、他家で育てられるようになったのは彼女の七歳のときからで、養家は芳町の浜田屋という芸妓屋であつた。浜田屋の亀吉は強情いっしやくと一いっ国こくと、侠きやんで通つた女であつた。豪奢ごうしゃの名に彼女は氣負つていた。その女を養母とした七歳のお貞は、子供に似合わぬピンとした気性だったので、一寸いっすんのくるいもないように、養母と娘の心はびつたりと合つてしまった。その点はお貞の

貞奴が、生の親よりもよく養母の気性と共通の点があつたといえる。

とはいえ、そうした侠妓に養われ、天賦の素質を磨いたとはいえ、貞奴の持つ美質は、みんな善き父母の授けたものである。優雅、貞淑——そういう社会に育つたには似合わぬ無邪気さ、それは大家の箱入り娘と、好人物の父との賜物である。一本気な持前も、江戸生れの下町のお嬢さんの所有でなければならぬ。其処へ養母によつて仁、侠とたんと、齒切れのよい娑婆つ気を吹き込まれたのだ。そうした彼女は養母の後立てで、十四歳のおりはもう立派な芳町の浜田屋小奴であつた。

廿九歳で後家になつてから猶更パリパリしていた養母の亀吉は、よき芸妓としての守らねばならぬしきたりを可愛い養娘であるゆえに、小奴に服膺させねばならないと思つていた、その標語——芸妓貞鑑は、みな彼女が実地にあつて感じたことであり、また古来の名妓について悟つた戒めなのであつた。彼女は言う。

「好い芸妓になるなら世話をして下さる方を一人と極めて守らなけりやいけない。それが芸妓の節操というものだ。金に目がくれて心を売つてはいけない。けれども不粹なことはいけない。芸妓は世間を広く知つていなければいけない。そして華やかな空気になければならない。地味な世界は他に沢山ある。遊ばせるという要は窮屈ではいけない。だから

お客よりも馬鹿で浮気な方がよい。理につんだ事が好きならば芸妓にはしやがしてもらい
 にははしない。そこで、浮気なのはよいが、慾に迷えば芸妓の估券こけんは下つてしまふ。大事
 な客は一人と極めてその人の顔をどこまでも立てなければならぬかわりに、腕でやる遊
 びなら、威勢よくぱつとやつて、自分の手から金を撒まかなければいけない。堅気ではない
 のだからむずかしい意見はしない。だがよく覚えてお置き、遊びだということを……」

それは彼女が十六のおり、初代奴の名を継いで、嬌名いや高くうたわれるようになった
 おりの訓戒だ。賢なる彼女は、養母の教えを強しかと心に秘めていたが、間もなく時の総理大
 臣伊藤博文侯が奴の後立てであることが公然にされた。彼女はもう全く恐こわいものはなしの
 天下になつたのである。総理大臣の勢力は、現今いまよりも無学文盲であつた社会には、あら
 ゆる権勢の最上級に見なされて、活殺与奪の力までも自由に所持してでもいるように思い
 なされていた。そして伊藤公は——かなりな我儘わがままをする人だといふので憎み罵ののするもの
 もあればあるほど、畏敬いけいされたり、愛敬あいきようがあるとして最眞ひいきも強かつたり、ともかくも明
 治朝臣のなかで巍然ぎげんとした大人物、至るところに艶材を撒まきちらしたが、それだけ花柳界
 においても勢力と人気とを集中していた。奴は客としては当代第一たる人を見立てたので
 ある。家には利者きけものの亀吉という養母が睨にらんでいる。そして何よりも——眠れる獅子王ししおうの

傍に咲く牡丹花のような容顔、春風になぶられてうごく雄獅子の髭に戯むれ遊ぶ、翩翩たる胡蝶のような風姿、彼女たちの世界の、最大な誇りをもって、昂然と嬌坊第一にいた。

彼女も、そうした社会の女人ゆえ、早熟だった。彼女は遊びとしては、若手の人気ある俳優たちと交際していた。そして彼女がもつとも好んだものは弄花——四季の花合せの争いであった。金びらのきれるのと、亀吉仕込みの鉄火とが、姿に似合ぬしたたかものと、姐さん株にまで舌を巻かした。

奴の芸妓としての盛時は十七、八歳から廿一歳ごろまでであろう。

奴は芸妓時代から変りものであった。その時分ハイカラという新熟語はなかったが、それに当てはめられる、生粋なハイカラであった。廿二、三年ごろには馬に乗り、玉突きをしたりしていた。髪もありあまるほどの濃い沢山なのを、洗髪の捻りっぱなしの束髪にして、白い小さな、四角な肩掛けを三角にかけていた。大磯の海水浴の漸く盛りになった最中、奴の海水着の姿はいつでも其処に見られ、彼女の有名な水練は、この海でおぼえたのであった。

「奴が来ておりましたよ、大磯の濤竜館に……男見たような女ですね、お風呂で、四

辺にかまわないで、真白に石鹼せっけんをぬって、そこら中あぶくだらけにして……」

そんなことを、あるおり、某華族の愛妾が言っていたことがあった。その語ことばのなかには、すこし反感をふくんだ調子があつたが、

「沢山な毛髪かみのけのなんのつて、お風呂の中でといて、ぐるぐると巻いているのを見ると、ほんとにその立派なことつて……」

彼女の傍若無人であつたことには、好い心持ちではなかつたらしいが、その容姿については感嘆していた。それはたしか彼女が十九位のことであつた。

その後わたしが、漸ようやく芝居のことなどもすこしばかり分りかけて来た時分に、芳町の奴が川上音二郎のおかみさんになるのだつてというのをきいて、みんなが驚ろいている通りに、大層な大事件のようにきいていたことがあつた。それは明治廿五年、奴が廿二歳のおりだと後で知つた。なんでわたしが大事件のように耳にとめていたかというのに、前にも言つた通り、芳町は近い土地であり、往來ゆききに浜田屋の門かどぐちも通つたり、自然と奴の名も聞き知つていたからであつた。それに、浅草あさくさ鳥越とりこえの中村座に旗上げをした、川上音二郎の壮士芝居の人氣は素晴らしかつたので——彼れが俳優として非凡な腕があるからというのではなく——書生が（自由党の壮士が）演説と芝居とを交ぜてするという事が、世間

の好奇心を誘つて評判されていた。わたしはその頃ぼつぽつと新聞紙や、『歌舞伎新報』などをそつと読みふけていたので、耳から聞く噂ばかりでなく、目からもそれらの知識がすこしはあつた。それに父は自由黨員に知己も多かつたので、種々話をしているときもあつた。川上の他に、藤沢浅二郎は新聞記者だとか、福井は『東西新聞』にいたがとか、壮士芝居の人物を月旦げつたんしていることもあつた。見物をたのまれて母なども行つたらしかつた。とはいへ、興味をもつても直すくに忘れがちな子供のおりのこと、川上音二郎が薩摩ガスリの着物に棒ぼうじま縞こくらの小倉袴まで、赤い陣羽織はつきりを着て日の丸の扇を持ち、白鉢巻さつまをして、オツペケ節を唄わなかつたならば、さほど分明はつきりと覚えていなかったかも知れない。しかし子供ごころに、オツペケペツポの川上はさほど傑えらい人だと思つていなかった。それよりも芳町の奴の方が遥はるかに——芸妓でも抱かかえ車ぐるまのある——傑えらい女だと思つていた。ななんで、川上のおかみさんになぞなるのだろうと、漠ばく然ぜんとそんなふうに思つたこともあつた。その後、川上座の建築みさきちようが三崎町へ出来るまで、奴の名には遠とほざかつていた。

けれどもそれはわたしが彼女の名に接しなかつただけで、彼女には新らしい生活の日の頁へが、日ごとに繰りひらかれていった。そしてその五、六年の間に、川上の单身洋行が遂行された。それは生涯をあらたに蒔まき直なおそうとする目的をもつた渡航であつた。そのおり

川上は、壮士俳優を止めてしまおうと思つていたとかいうことだったが、米国に渡つてから再考して見なければならぬと思ひ、充分に考慮してのち、やっぱり最初自分の思立つたことは間違つていなかったと気がついた。それから直に帰朝した彼れは、もうすぐに演劇革新論者であつた。時流より一足さきに踏出すものの困難を、つぶさに管めなければならぬ運命を彼れは担つてかえつてきたのだつた。そして、当然、夫の、重い人生の負担に對して、奴のお貞も片荷を背負わなければならぬ運命であつた。漸く平靜であらうとした彼女の人生の行路が、その時から一段峻しくなり、多岐多様になつていつた分岐点がある時であつた。

川上音二郎の細君の名が、わたしたちの耳へまた伝わつて来たところには、彼女は奔命ほんめいに勞れきつていたのだ。彼女は（最近引退興行のうちに、『演芸新聞』に自己の談話として載せたように）芸妓から足を洗つて素人しろうとになるにしても、妾めかけと呼ばれるのがいやで、どうか巡査でもよいから同情の厚い人の正妻になり、共稼ともかせぎがして見たいと思つていたので、川上との相談もとのい結婚はしたが、勝氣の彼女としては夫とした川上をいつまでもオツペケペツポではおきたくなかつたのだ。

在米一年半ばかりで、野村子爵に伴われて歸つて来た川上は、洋行戻りを土産みやげに、かつ

て自分がひきいていた一団のために芝居を打たなければならなくなり、浅草区駒形こまかたの浅草座を根拠地にして、「又意外」で蓋ふたをあけた。その折の見物の絶叫は、凄まじいほどで、新派劇の前途は此処に洋々とした曙あけぼのの色を認めたのであった。それに次いで起った問題は、劇道革進の第一程として、欧米風の劇場を建設することで、川上は万難を排してその事業に邁進ばくしんした。それとても奴の力がどれほどの援助であつたか知れなかつた。

浜田屋亀吉の娘で芳町の奴である細君の名は、貧乏な書生俳優、ともすれば山師と見あやまられがちな川上よりも、信用が百倍もあつた。細君の印形いんぎようは五万円の基本金を借入れて夫の手に渡し、川上座の基礎はその金を根柢こんていとして築きあげられていった。

様々の毀誉褒貶きよほうへんのうちに、夫妻の苦心の愛子——川上座は出来あがつていった。もうやがて落成しようとした折に、不意に夫妻の仲に気まずい争いが出来た。しかもそれが世間よこしまにありがちな、ほつとした一時の安心のために物質的な関係からおこつた問題ではなかつた。奴は、一も夫のため、二も男のためと、そうした社会にあつては珍らしい貞節のかぎりを尽し、川上を世に稀まれな男らしい男、真に快男子であると、全盛がもたらす彼女の誇りを捨て、わが生命いのちとして尽していたのである。それが、ある女に子まで産ましていると、いう事がわかつた。その女はある頭官の外がいしやう妾めかけで、川上はその女を、上野鶯うぐいすだに溪たにの塩

原温泉に忍ばせてあるという事までが知れた。奴は養母かめきちの前へも自分の顔が出されないように思った。けれど怨み死うらみじにに死んでしまうほど気が小さくもない彼女は、憤懣ふんまんの思いを誰れに洩もつすよりは、やつぱり養母に向つて述べたかった。それがまた、川上との縁は自分の方から惚れ込んだのもあり、養母も川上の男らしいところを鼻屑ひいきにしていただけに、言うのも愁つらかつたが、聴く方の腹立ちは火の手が強かった。何分にも奴にむかつて芸人の浮気沙汰ざたとして許すが、不義の快樂けらくは厳しくいましめたほどの亀吉、そうした話を聴くと汚ないものに触れたように怒つた。川上の産ませた子を誤魔化ごまかして、秘密に里子にやつてしまったということをきくと、そんな夫とは縁を断つてしまえと言出した。

川上は浜田屋へ呼びよせられて来てみると、養母と奴とは冷かな凄すいい目の色で迎えた。三人が三つ鼎かみなえになると奴は不意に、鬚まげの根から黒髪をふつつと断つて、

「おつかさんに面目なくなつて、合す顔がありませんから」

と、ぷいと立つて去つてしまつた。それにはさすがの策士川上も施す術すべもなくて、気を呑のまれ、唾然あげんとしてゐるばかりであつたが、訳を聞くまでもない自分におぼえのあること、うなだれているより他ほかはなかつた。養母かめきちにとりなしを頼もうにも、妻よりも手強てごわい対手あいてなので、なまじな事は言出せなかつたのであろう。も一度海外へ出て、苦学をしてのち詫わ

びにくるから、奴は手許へあずかつておいてくれと詫を入れた。けれど亀吉はいつかな聴入れはしない。

「もとの通りにして返したならば受取ろう。」

それが養母の答えであった。川上は是非なく、同郷の誼のある金子堅太郎男爵の許に泣いていった。何故ならば、金子男が、伊藤総理大臣の秘書官のおり、ある宴席で川上の芝居を見物するように奴にすすめて、口をきわめて川上の快男子であることを説いた。そうした予備知識を持つて、はじめて川上を見た奴は、上流貴顕の婦人に招かれても、決して川上が応じてゆかないということなども聴いて、その折は面白半分の興味も手伝ったのであったが、友達芸妓の小照と一緒に川上を招いて饗応したことがある。それが縁で浜田屋へも出入するようになり、伊藤公にも公然許されて相愛の仲となり、金子男の肝入りで夫妻となるように纏った仲である。それ故、そうことがもつれてむずかしくなつては、金子氏にすぎるよりほか、養母も奴も聴入れまいと、堅い決心をもって門をたたいたのであった。その代りには断然不始末のあとを残すまいという条件で持込んだ。そして、漸くその件は落着した。

ひとつ過ぎればまたひとつ、内憂に外患はつづいて起つた。夫妻が漸やつと笑顔を見せ

るようになる、またしても胸に悶える悩みの種、川上座の落成に伴う新築披露、開場式の饗宴などに是非なくてならない一万円の費用の出どころであった。けれども奴の手許からは出せるだけ出し尽している上に、五万円の方もそのままになっている。開場式さえあげれば入金の道がつくので、それを目当にして高利貸の手から短かい期限で、涙の滾れるこぼような利子の一万円を借入れ、新築披露の宴を張り、開場式を華々しく挙行した。

川上座——この夫婦が記念としてばかりでなく、劇壇新機運の第一着手の、記念建物としても残しておきたかった川上座は、三崎町の原に、洋風建築の小ぢんまりとした姿を見た。いまは冷氷庫こおりぐらになってしまったあの膨大な東京座も、その頃新築され、後の方には旧女優者の常小屋じょうこやの、三崎座という小芝居があった。夏などは東京座や川上座へゆくには、道が暑くてたまらないほど小蔭ひとつない草いきれのしている土地であった。そのくせ、座へはいつてしまうと——ことに東京座などはだだっ広いのと入りがなかったので、涼しい風が遠慮がなさすぎるほど吹入って、納涼気分なすやうに満ちた芝居小屋であった。川上座は帝劇と有楽座をませた造り方であったので、その時分の人たちにはひどく勝手違いのものであったが、開場式に呼ばれたものは川上の手腕てんぱんに誰れも敬服けいぷくしあっていた。一千にあまる来賓はすべての階級を網羅もつらし、その視線こくせんの悉くそそがれている舞台中央には、劇場主

川上音二郎が立つて、我国新派劇の沿革から、欧米諸国の劇史を論じ、満場の喝采をあげながら挨拶を終わった。その側に立つ奴の悦びはどれほどであつたらう。共に労苦を分けた事業の一部は完成し、夫はこれほどの志望を担うに、毫も不足のない器量人であると、日頃の苦悩も忘れ果て、夫の挨拶の辞の終りに共に恭しく頭をさげると、あまりの嬉しさに夢中になつていたために、先日のいきさつから附齧を用いている事などは忘れてしまい、音がして頭から落ちたもののあるのに気がつかなかつた。湧上つた笑い声に気がついて見ると、あにはからんやの有様、舞台監督は狼狽て綴帳をおろしてしまつたが――

赤面と心痛――開場式に頭が飛ぶとは――彼女は人知れずそれを心に病んだ。それが箴をなしてというのではないが、もとより無理算段でやつた仕事だけに、たつた一万円のために川上座は高利貸の手に奪られなければならなかつた。川上は同志を集めて歌舞伎座で手興行をした。わが持座を奪われぬために、他座で開演した心事に同情のあつた結果は八千円の利益を見、それだけは償却したが、残る四千円のために彼らは苦しみぬいた。

そのころの住居が大森にある洋館の小屋であつた。金貸に苦しめられた川上が憤然として代議士の候補に立つたのは、高利貸退治と新派劇の保護を標榜したのであつた

が、東京市の有力な新聞紙——たしか『万朝報』であつた——の大反対にあつて非なる形勢となつてしまつた。

それらが動機となつて川上夫婦の短艇旅行は思立たれた。厭世観と復讐の念、そうした夫の心裏を読みつくして、死なば共にとの意気を示し、死ぬ覚悟で新しい生活の領土を開拓し、生命の泉を見出そうではないかと、勧めはげましたのは奴であつた。妻の言葉に暗示を与えられてふるい立つた川上は、失敗の記念となつた大森の家を忍び出る用意をした。無謀といえれば限らない無謀であるが、そのころはまだ郡司大尉が大川から乗出し、北千島の果までも漕附けた短艇探検熱はまだ忘れられていなかつたから、川上の機智はそれに学んだのか、それともそうするよりほか逃出す考えがなかつたのか、ともあれ、人生の峻しい行路に、行き悩んだ人は、陰惨たる二百十日の海に捨身の短艇を漕出した。

短艇日本丸は、暗の海にむかつて、大森海岸から漕ぎだされた。ものずきな夫婦が、ついそこいらまで漕いでいつてかえってくるのであると、気がついたものも思つていたのであろうが、短艇の中には、必需品だけは入れてあつた。寝具のかわりに毛布が運ばれてあつた。とはいえ、幾日航海をつづけようとするのか、夫婦にも目あてはなかつた。夫は漕ぐ、妻は万一のおりにはと覚悟をしていたが、夢中で、小山のような島があると見て漕ぎ

つけた場所は、横須賀軍港の軍艦富士の横つばらであった。

鎮守府に呼ばれて訊問しんもんにあつたが、全く何処とも知らず流されて来て、島かげを見付けてほつとした時に夜はほのぼのと明け、それが軍艦であつた事を述べて許された。その上、咎とがめられたのが好都合になつて様々の好誼こうぎをうけ、行手の海の難処なども懇篤に教え諭さとされ、鄭重ていちょうなる見送りをうけて外洋そとうみへと漕出した。

四

それからの、貞奴となるまでの記憶の頁は、涙の聯珠れんじゆとして、彼女の肉体が亡びてしまつても、輝く物語であろう。遠州灘ゑんしゆの荒海——それはどうやらこうやら乗切つたが、掛か川けがわ近くになると疲労しつくした川上は舷ふなばたで脇腹わきばらをうって、海の中へ転ころげおちてしまつた。船は覆くつがえつてしまつた。奴は咄嗟とつさにあるだけの力を出して、沈んだがまた浮上つた夫を背にかけて、波濤はとうをきつて根かぎり岸へ岸へと泳ぎつき、不思議に危難はのがれたが、それがもとで川上は淡路洲本の旗亭あわじすもとに呻吟しんぎんする身となつてしまつた。その報をきいて駈付かけけた門弟たちは、師の病体からだを神戸にうつすと同時に「楠公父子桜井の訣別けつべつ」という、

川上一門の手馴れた史劇を土地の大黒座で開演した。それが土地の気受けに叶い、神戸における楠公様の劇である上に、川上の事件は当時の新聞が詳細に記述したので、人気は弥がうえにと添い、入院費用はあまるほど得られた。川上の恢復も速かであった。とはいえ、川上は健康を恢復すれば、またも行方定めぬ波にまかせて、海の旅に出ると言つてきかなかつた。その折、近くに開かれる仏蘭西の博覧会へ日本劇を持込んではその相談が来た。

それこそ、新生活を開拓しよう、無人島へでもよいから行きつこうと思つていた夫婦には、渡りに船の相談なので、一も二もなく渡航と定め、川上一座一行廿一人は結束して立つた。婦人はその中にたった二人、いうまでもなく一人は奴で、一人は川上の姪の鶴子（在米活動俳優として名ある青木鶴子、後に早川雪洲の妻）で、奴は単に見物がてらの随行、鶴子は彼地で修業するのが目的であつた。

亜米利加のサンフランシスコに一行は上陸した。仲に這入つた人の言葉ばかりを真に受けて、上陸後四日間ばかりをうやむやに過してしまつたと、仲人は逃亡してしまつた。知らぬ間に川上の名義で借入れられた莫大な借金が残つていられるばかり、約束になつているといつた劇場へいつて見れば釘附けになつて閉ざされている。開演しさえすればとの儚な

いたのみに無理算段を重ねていた一行は、直に糊口にも差支えるようになり、ホテルからも追出されるみじめさ、行きどころない身は公園のベンチに眠り、さまよい、病犬のように蹠々そうそうろうろう々々として、僅かの買喰いに餓をしのぐよりせんすべなく、血を絞る苦しみを忍んで、漸くボストンのカリホルニア座に開演して見たものの、乞食の群れも同様に零落れた俳優たち、それがなんで人気を呼ぼう、当ろうはずがなかった。窮乏はいやが上にせまる、何処の劇場でも相手にはしてくれない。ことに貧弱きわまる男優が女形であるときいては、まるで茶番のように笑殺され、見返られもなかった。

一行は十月の異国の寒空に、幾日かの断食を修行し、野宿し、まるで聖徒の苦行のよくな辛酸を嘗めた。

シカゴ、ワシントンストリートの、ライリリック座の座主の令嬢こそ、この哀れな、餓死に瀕した一行の救い主であった。ポットン令嬢は日本劇に興味をもっていたので、父親を納得させて川上一行を招くことにした。座主はお嬢さんの酔興を許しはしたが、算盤をとつての本興行は打てぬので、広告などは一切しないという約束のもとに、とにかく救いあげられた。

座主の方で広告はしないとはいえ、開けるからには一人にでも多く見物してもらいたい

のが人情である。そこでどんなに窮した場合にも残しておいた、舞台で着る衣服 甲 冑
 に身を装い、おりから降りしきる雪の辻々、街々を練り歩いて、俳優たちが自ら広告し
 た。絶食しつづけた彼れらが、重い鎧を着て、勇氣凜然たる顔附きをして、雪の大路を
 闊歩するその悲惨なる心根——それは實際の困窮を知らぬものには想像もつきかねるいた
 ましきである。舞台に立つて、児島高德こじまたかのりに投げられた雑兵ぞうひようが、再び起上つて打向つ
 てくるはずなのが、投げられたなりになつてしまつたほど、彼らは疲労困憊こんばいの極に達し
 ていた。百弗ドルの報酬を得てホテルに駈込かけこんだ時には、食卓にむかつた誰れもかれも、嬉し
 泣に、漕々さめぎめとしないものはなかつたという。

一座はその折、女優がなかつたために苦い経験をしたので、奴は見兼ねてその難儀を救
 った。義理から、人情から、それまで一度も舞台を踏んだことのなかつた身が一足飛びに、
 勝れた多くの女優が、明星と輝く外国において、貧乏な旅廻りの一座のとはいえ、一躍し
 て星女優プリマドンナとなつたのである。しかし、暫くの間はほんの田舎廻りにしか過ぎなかつたが、
 かえつてそれは、マダム貞奴としての要素をつくる準備となつたといつてもよいが、一行
 の難渋は実に甚だしかつた。ボストンへ廻つて来たおりには、心労の結果川上が病氣に罹かか
 り、座員のうち二人まで異郷の鬼となつてしまつた。

「俺おれが全快するまでは下手へたなことをするな。」

川上は病いの床でそう言続けていたが、生活のためには言附けも背そむかなければならなかった。それに為なすこともなく日を過しているのでは、悲境に、魂を食われてしまったような座員の団結も頼まれず、座員の元気を鼓舞するには劇場へ出演するに限ると、川上にかくれて貞奴が一座を引連れて出た。多分そのおりのことであろう。二人の座員の死んだのをどうする事も出来ぬので、土地の葬儀会社へ万端のことを頼んでおいた。劇場から帰ってきて見ると死者の髻ひげは綺麗に剃そられ、顔も美しく化粧され、髪も香水がつけて梳くしけられ、新しい礼装をさせられて花輪を胸に載せ、柩ひつぎの中に横たわらせられてあった。昨日まで食を共にし、生死もひとつにと堅い団結を組んできた一行のものは、その死者の姿を見ると、いかにも安易やすやすとして清げなさまで、昨日までの陋苦むさくるしい有様とはあまり違ちがって、立勝たちまさって見ゆる紳士ぶりに、生きている方がよいか、死んだ者の方がよいかと妙な風な考えになつて、頭をさげるばかりだったという話を聴いた。ことに死者の胸に組合せた手の指の爪つめまで綺麗に磨かれてあったという事が、舞台上で化粧をこそすれ、何事にも追われがちの不如意の連中には、指の爪のことまで織デリケート細こな気持ちを持つていられなかった人々が、感銘深くながめたという有様だった。

病床で川上が言続けていた、フランス・パリーの博覧会——そこそ、マダム貞奴の名
 声を赫々かくかくと昂げあさせたものである。海外にあつて最も輝かしかつた三ツの歓喜、そのひ
 とつは亜米利加アメリカワシントンで、故小村公使の尽力で、公使館夜会に招かれ、はじめて上流
 社会に名声を博し得たこと。またひとつは英吉利イギリスで上村大将に遇いあ、その力にてバッキン
 ガム・パレスで、日本劇を御覧に入れたこと——たしかそのおり貞奴は道成寺どうじょうじの踊の衣
 裳のまままで御座席まで出たとおぼえている。——もひとつは、仏蘭西フランスのパリーで栗野公使
 の尽力により、一行が熱望しきつていた博覧会の迎えをうけたことである。この事こそ、
 ほんとに彼れらのためにも、日本劇のためにも前代未聞の出来ごとだったのだ。あらゆる
 天下の粹を集めた、芸術の源泉地仏蘭西パリーで、しかも、そのもろもろの美術、工芸、
 芸術品に篩ふるいをかけた博覧会々場である。見る人もまた一国一都の人ばかりでなく、世
 界各地の人を網羅し尽している。その折に、その中で、耳目を聳そだたして開演する事が出
 来ようとは、いかに熱望していたとはいえ、昨日までの田舎廻り、乞食芝居の座員には、
 万に一の希望も絶望であろうとされていたものが——加うるに日本劇川上一座の人氣は、
 空前絶後とされ、夢想にも思いも浮べぬ、彼地の劇界を震撼させたものであった。なおそ
 の渡仏の前、ボストンで英吉利の名優ヘンリー・アーヴィングの「マーチャント・オブ・

ベニス」が当たったのかぶせて日本風に改作し「シャイロック」として上演したが、その入場券一弗ドルが三弗五弗というふうにに競上げせりあられたというのは、もの珍らしさが手伝ったとはいえ大成功といわなければならぬ。かくして帰還した川上夫妻の胸には、仏蘭西の芸術家が重く見るオフシエ・ダカジメ三等勲章が燦さんとしていた。

貞奴、貞奴、その名は日本でより海外に高くひろ拡まった。名実めいじつは川上一座でも、彼の一座でなく彼女の一座として歓迎された。一度帰朝した彼女らは陣容を改め、今度こそ目的のない漫然とした旅役者ではなく、光彩ある日本劇壇として明治三十四年に再び渡欧した。座長はいうまでもなく川上音二郎、星女優ススターは貞奴、一座の上置きには故藤沢浅二郎、松本正夫、故土肥庸元（春曙）の諸氏のほかに、中村仲吉という女優（この優ひとは大柄の美人で旅廻りの女役者としてはほんとに芸も立派な旧派出の女であった）を加えて一行は廿六、七人であった。仏、英、露、独、西、伊、澳、匈の諸国を巡業し到る処で大歓迎をうけた。この興行から帰つて来ると故国日本でも貞奴を歓迎して、化粧品には争つてマダム貞奴の仏蘭西土産であることを標ひょう榜ぼうした新製品が盛んに売出され、広告にはそのチャーミングな顔が印刷されたりした。そして、川上の懇望ひのきによって、故郷の檜舞台に、諸外国の劇

壇から裏書きされてきた、名誉ある演技えんぎを見せたのは、彼女が三十三歳の明治卅五年、沙セクスピアー翁の「オセロ」のデスデモナを、鞆音夫人ともねという名にして勤めたのが、初舞台である。そして亡夫の七回忌にあたる大正六年十月、日本橋区久松町の明治座で女優生活十五年間の引退興行を催し、松井松葉氏によって戯曲となった、伊太利イタリヤの歌劇「アイーダ」を上場した。川上の旧門弟とは、貞奴がたてた川上の銅像や、郷里の墓所のことなどから、心持ちの解けあわない事があつて出演しなかつたが（彼らは川上の望んでいた芝高輪たかなわ泉岳寺の四十七士の墓所の下へ別に師の墓を建て、東京における新派劇団からの葬式を営んだ）幸いに伊井、河合、喜多村の新派の頭かしら立たった人が応援して、諸方からの花輪、飾りもの、造りもの、積つみものなどによつて賑にぎわしく、貞奴の部屋や、芝居の廊下はお洩さい気分、祭おまつ礼り気分りのように盛んな飾りつけであつた。福沢氏の催した連中は興行中を通して五千人の申込みで、その多くは招待であつた事なども素晴らしい事として語りあわされた。

本名のお貞と、芳町時代の奴の名とあわせて、貞奴と名乗つた女優の祖を讃するに、わたしは女優の元祖出雲いずものお国と同位に置く。世にはその境遇を問わず、道德保安者の、死んだもののような冷静、無智、隸属、卑屈、因循をもつて法のりとし、その条件にすこしでも抵触すれば、婦徳を紛うんぬん紘んする。しかし、人は生きている。女性にも激しい血は流れてい

る。人の魂を汚すようなことは、その人自身の反省にまかせておけばよいではないか？
わたしは道学者でない故に、人生に悩みながら繊い腕ほそに悪戦苦闘して、切抜け切抜けして
ゆく殊勝さを見ると、涙ぐましいほどにその勇気を讃え嘉したく思う。

ああ！ 貞奴。引退の後の晩年は寂せき寞ぼくであろう。功な為なり名遂げて身退くとは、古いにしえの
聖人の言葉である。忘れられるものの寂しさ——それも貴女あなたは味わねばなるまい。しかし
貴女は幸福であつたと思う。何故なら貴女は、愛されもし愛しもし、泣いたのも、笑つた
のも、苦しんだのも、悦んだのも、楽しんだのも、慰められたのも、慰めたのもみんな真
剣であつた。それゆえ貴女ほど信実の貴い味を、ほんとに味わつたものは少ないであろう。
その点で貴女は、真まに生甲斐いきがいある生活をして来たといわれる。わたしは此処こゝに謹つつしんで御身
の光輝ある過去に別れを告げよう、さようならマダム貞奴！

——大正九年三月——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1920（大正9）年2～4月

※「松居松葉」と「松井松葉」、「嘗《な》め」と「嘗《な》め」の混在は、底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2005年9月24日作成

2007年4月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

マダム貞奴

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>